

## 内田百閒「由比駅」論

——記憶の中に浮かびあがる捉え難い自己の姿——

吉 川 望

### 一

「由比駅<sup>(1)</sup>」は、百閒の最初期の作品「花火<sup>(2)</sup>」と類似の展開を持っている。どちらも、作中の「私」が、仄めかしを受けながら進んだ筈句、自己の根源的なあり方を思い知っていくというものである。しかし大きく異なる点は、「花火」の「私」が、どことも知れない場をただ女に導かれるままに行くのに対し、「由比駅」の「私」は、終着点を定めた列車に乗りながら、いくつもの過去の出来事を連鎖的に想起していくということである。「由比駅」においては、必ずしも「私」自身は自覚的でないにせよ、目的地に向う途上での記憶の想起によって、自己内部を掘り起こしていく方向性が「花火」よりも明確であると言えるのだ。

この記憶の想起ということに着目すると、「由比駅」の三ヶ月前に発表された随筆「区間阿房列車<sup>(3)</sup>」との対照性もまた、非常に興味深いものとして浮かび上がる。「区間阿房列車」は、百閒の実際の列車旅行<sup>(4)</sup>について綴ったもので、これと重複する行程<sup>(5)</sup>を乗車する設定で「由比駅」が創作された経緯がある。そしてこの「区間阿房列車」にも、記憶の想起が旅の大きな感興として書きとめられているのである。

・線路の傍の崖の裾から、黒い肌の岩が露出してゐる。その岩の形を遠い昔の学生時分の行き来に見覚えた様な気がする。秋はそう云ふ崖に昼間でも虫が啼きしきつて、虫の音が轟轟と走り過ぎる汽車の響きを消したのを思ひ出す。

・ちつと見てゐたら、この岩の姿にも見覚えがある。学生の時分から通る度に、氣にとめるともなく見馴れた形を覚えてゐる。さう思つて見れば今も同じ姿で、何十年も過ぎた思ひ出が、満ちた潮の波をかぶつて、今日の事の様  
様に新鮮である。（傍線論者、以下同じ。）

このように「区間阿房列車」には、「黒い肌の岩が露出し」た眼前の光景に対して、かつて青春の日に見たそれとありありと重ね合わせ、「今も同じ姿」だと感懐深く見入った経験が記されている。これと比べて対照的なのは、「由比駅」では、「私」の視線が、現在の車窓の光景から連想される全く別の過去に向けられてゐる点である。

それから熱海へ行く間、隧道が長いのが短かいのが、明かるくなったり暗くなったり、ちらちらするのもあつて、それで気分がうろろする。裸の岩が露出してゐる崖を見たら、塔ノ山の岩肌を思ひ出した。郷里の町に第六高等学校が出来る時、山裾の水田を潰して地形を造つた。地形に使ふ石を採るので、近くの塔ノ山にダイナマイトを仕掛けて岩を割つてゐると、その上にあつた墓場が崩れて、町内の岡友のをばさんの棺桶が出て来たさうである。

ここで「私」は、「裸の岩が露出してゐる崖」から郷里の「塔ノ山の岩肌」を思ひ出し、さらに「塔ノ山」に関わる過去の出来事について連想を広げていく。こうして「私」は、次第に眼前の光景から離れた過去の記憶に没入し、自己の内側へ分け入っていくのである。

両作品は由比方面への旅における記憶の想起というものを等しく取り上げつつ、随筆と創作でその取り上げ方、描き方には明確な違いがつけられている。過去が彷彿としてよみがえる感激を「区間阿房列車」に書きとめた百間が、

同じ行程を想定して「由比駅」を書くとする際、場がもたらす記憶の想起の感触にこだわらず、そこから導かれる境地において、創作的工夫を凝らしたと推測することができらるだろう。すなわち、このような「区間阿房列車」からの執筆経緯や、先に述べた「花火」との対照性を踏まえるならば、「由比駅」の創作においては、百閒が、場がもたらす記憶の想起というものを通して人間の内側を掘り起こす作品に仕立てようとしたことが考えられるのである。

野口武彦氏は、「由比駅」について、「少年時代に飼いだじめた罪障感の再現へと主人公をいざなうてゆく<sup>(6)</sup>」と述べた。後に詳述するが、過去の時空に入り込むような「私」の想起の様相は、まさに「再現」と呼ぶべき立体的、体感的なものとなっている。この記憶の再現が、自己の根源的なあり方を捉えることへと結びついているとするならば、まずは、「私」がどのような経緯をたどって記憶を再現していくのかを具体的に検討しなければならない。その上で、見定められんとするのは如何なる自己の姿なのか、読み解く必要があるだろう。あらかじめ見通しを述べておくならば、「私」が次第に見出していくのは、「飼いだじめた罪障感」にとどまるものではなく、その先にあるものだと思うれる。端的に根拠を言えば、飼いだじめを思い出した後の結末箇所においても、「私」はボーイによって「さうでせう。さうなんでせう」と何かを問い詰められ続けているからである。

以下では、まず「私」の記憶の再現され方について、つづいてそこに何が思い起こされているのかについて分析し、記憶の中に浮かび上がる「私」という人間のあり方を明かにしていくこととしたい。

## 二

東京駅の案内所の前に起つて待ち合はせる打合せをしたから、行つて見たがまだ来てゐない。多分彼の方が先だらうと思つたけれど、或は差間へが出来て遅れたかも知れない。約束通りの所に起つて、ぼんやりしてゐた。

いいお天気で駅の前の広場に午過ぎの日が照つてゐる。日向が赤い。日陰が黄色い。をかしいなと思ふ。そこいらを往つたり来たりする人影が真黒に見える。

作品冒頭の「私」は、このように漠然とした違和感を覚えている。そしてこの違和感に誘引されるかのように、この後「私」が捉える出来事は非現実性を帯びてくる。右の箇所はいわば、現実と非現実が不分明な、不確かな世界の始まりを語るものとも見えるものである。

・いつもの通り大勢人がゐるけれど、あんまり動いてゐない。その中の幾人かは、立ち停まつて私が歩いて行くのを見てゐるらしい。

① 壁際の行列が一番長い。尻尾の端が私の起つてゐる案内所の前の通路まで伸びて来てゐる。その列の真中辺りの顔が一つ、こつちを向いた。辺りのもやもやした中に、こつちへ向いた顔のまはりだけが白けてゐる。

何だか気になるので、そつちを見てゐたら、その顔が列を離れた。和服の著流しの男が、すたすた歩いて、私の方へ近づいて来る。かうしてゐては、いけないと云ふ気が出した。

漠然とした違和感を抱く「私」は、周囲の人物や状況などを過敏に捉え、事態を自分に引き寄せて意識していく。傍線部にあるように、「私」は、静まり返った群衆の中から自分に視線が向けられていると感じ、さらには一人がこちらに向かつてくるのを見出して、良くないことが自分に降りかかることを予感するのである。「私」の視点で語られている以上、「私」の把握が事実在即したものであるのかどうかは判定できない。しかし少なくとも、「かうしてゐては、いけないと云ふ気が出した」という感覚的な受け止め方は、「私」が理由を意識しないままに〈場〉の状況を自分に結び付けて解釈していることを表していると言える。そして、〈場〉を自らの印象において解釈するこの感性こそが、「私」の記憶を次々と呼び起こす端緒となるものだと思われるのだ。

「いちですよ」「いちと云ふ犬をつたでせうが」と、犬の名を名乗る見覚えのない男に呼びかけられた「私」は、

「何を云つてゐる」と不合理だという認識を持ちながらも、「しかしいやな氣がして来た」と、内心に不穩なものが湧くを感じてゐる。また、

「先に行つてゐるつて」

「やう云ひましたよ」

先に行くと言つても、汽車の数はきまつてゐる。何を云つてゐるのか。先へ行けと言つたのかも知れない。なぜだか解らないが、それならそれでもいい。後を振り返つたが、さつきの男はもうゐない。行列に歸つたかと思ふ。しかし行列は改札を通つてゐる。<sup>②</sup>一番長かつた壁際の列の尻尾ばかりが少し残つてゐる。その残りも見てゐる内になくなつた。

波線部①②のように、「私」は行列の端を「尻尾」と意識している。そして、その行列の中に「いちと云ふ犬」を名乗る男を見出し、「先へ行つてゐる」という言葉を聞くと同時に見失つたことを、「私」は語るのである。この語り方からは、「私」が、あらかじめ微かに犬のいちのイメージを自身の内に宿していることが見て取れる。「私」は、このいちのイメージに誘われて、「よしてもいい」のに「勝手に歩き出して」行くのだ。次の箇所は、そうした「私」におけるいちのイメージの伏在を裏づけるものである。

・その時分、人氣の少くなつた家の中に、大きなぶちの犬がゐた。思ひ出し掛けて、胸先から戻す様な、いやな氣持になつた。

・さうして一礼して通り過ぎた。ボーイの行つた後が少し臭い。何処から来るにほひだか解らないが、その聯想が愉快ではないから氣を散らす。

一つ目の引用は、線路か車輪かの音によつて生家を思い出し、続いて、当時飼つていた「大きなぶちの犬」へと意識が結びついていく箇所である。ここで「胸先から戻すような、いやな氣持になつた」というのは、二つ目の引用箇

所でボーイに臭いを感じて「聯想が愉快ではない」と言うのに連動していることが窺え、「私」の内部にたしかに何かしら不快な犬の記憶があり、そのイメージが膨張していることがわかる。そしてこの後さらに、眼前の崖の光景から再び郷里を思い出し、犬をいじめた記憶を想起していくところで、「矢つ張りさうなので犬の名前はいちと云つた」と、「私」はついに潜在していたイメージを捕捉するのである。ここでの「矢つ張りさう」とは、東京駅で男が名乗ったことを追認するものであり、イメージを言葉で捉え直した瞬間を示すものである。

このように「私」は、東京駅の男を皮切りに〈場〉を自ら解釈し、自身の内にあるいちのイメージに導かれながら、記憶を再現していく。しかし、先に触れたように、「私」の記憶はいちをいじめた出来事がそのすべてではない。いちいじめを思い出した後、「私」はボーイと知らない婦人から、連れが同じ列車に乗っているのだらうと問われ、由比のホテルに到着してからも「お待ち兼」の人物がいると告げられる。覚えのない待ち人の存在が重ねて示唆されるわけだが、「それでお出掛けになる気におなりなすつたのでせう」とまで言われるところには、単なる待ち人というよりも、この道行きに「私」の認識していない核心が存在するということ、そしてその見極めが待たれているといった印象が、「私」に与えられんとしていると読めるのであろう。

やがて「私」は、「あんまり古い事が、中途までさう思つた儘で、その儘になつてゐると、いろいろいけませんですわねえ」という女の言葉につづいて、父の病床とそこに現れたいちの姿について記憶を呼び出す。

「ですから、旦那様、ああほつといたしましたわ」

「何が」

「ですから矢つ張り、一度は確かめておいて戴きませんと」

「何を云つてるのだ」

女の言葉は、このときの記憶こそが、「私」にとって思い出すべきものであったことを示している。しかし「私」

の反応を見れば、未だそれには思い至っていないことが明白だ。父の病床とそこに現れたいちについての記憶には、見出すべき核心が埋まっているのにもかかわらず、「私」はそれを自覚しない。つまり「私」は、自身の記憶に十分向き合っていないことなのである。

すなわち、「私」の記憶とは、出来事の全貌が見えてもなお、底から掘み取らねばならない意味を孕むものとして描かれていると言える。言い換えれば、容易に見出すことのできない意識の深層部分の存在が、記憶の再現を通して浮かびあがっているのである。その深層部分の捉え難さとその内実が、「私」という人間のあり方として作品に問われていると考えられるであろう。では、故郷、いち、父といった記憶を想起しつつ「私」が志向する捉え難い深層の内実とはどのようなものであるのか。次節で読み解くこととしたい。

## 三

結末部分で、「私」が「もういい」と言うのに対し、ボイは「よくはないです。（略）さうなんでせう」と何かを認めさせようと激しく詰め寄っている。「私」が自身の深層に向かうことに抵抗していることは明らかで、その結果、最終的にもその内実は明確にならない。ここで、「私」の深層の内実はこのように徹底して見据え難いものとして描かれていることを踏まえつつ、なおそれがどのようなものであるかを読み解こうとするならば、（一）既に全貌を現したいちじめの記憶と父についての記憶、（二）核心部分を思い知るよう催促する人物の言動、この二点から推断していくほかないであろう。

(二)

まずは、二つの記憶を、共にいちの登場する記憶として連続性の中で捉えることで、「私」の深層を探ってみた。

一つ目の記憶の想起で、「私」は、自分が犬のいちにどう向かったかについて、「私が追ひ込んだのではなく、犬が逃げ込んだから、後を追つ掛けたのである」と細部にこだわって語っており、事の始めからなるべく具体的に思い起こそうとしていることが窺える。また、追ひ廻した理由についても、「春機発動期」であり、「えたいの知れない憂悶のはけ口がなかつた為かも知れないが」と自身を省み、憎さからの行動ではなく歯止めのきかない癖になっていたと振り返る。つまり、いちを追ひ廻していじめた記憶については、「私」自身、ある程度相對視し、意味づけているのである。

しかし、犬を追ひ廻した自分の興奮の感覚をまざまざと思い出すにつれ、「私」は次第にその記憶の中に入り込んでいく。

それから調子がついて、追つ掛けながら背中でも尻でも頸でも構はずに突つ突くから、犬はうろたへて逃げ廻り、追ひ詰められると、けんけん鳴き出す。ますます興が乗つて来るので、ゆるめる事はしない。こちらも興奮してゐるから、息をはずませながら追つた。

ここには、たがの外れた「私」とうろたえる犬が、本能的な部分で対峙する瞬間が再現されている。回想する「私」は、この時の異常なまでの興奮、暴力的衝動への囚われを生々しく振り返っているのである。

非常に速く走つたけれど、こちらも一生懸命だから、すぐに追いつき、青草の中を向うへ抜ける黒い胴体のどこかを竿の先で思ひ切り突いた。大きな消し護謄の様な手ごたへがしたと思ふと、井戸の上をひらひらと飛び越えて、向うの側からこつちを振り向き、薄闇の中で白い歯をむき出した。頭を低くして身構へする様な恰好をす



る。不意にこはくなつて、草の中に竿を投げた儘、後を見ずに家へ歸つた。

「不意にこはくなつ」たのは、興奮の只中で相手の存在が、突如「大きな消し護謄の様な」感触と「白い菌をむき出す」という反撃の気配となつて、「私」に強い生理的な違和感をもたらしたためである。つまりここで「私」は、目の前のいちを見慣れた飼ひ犬ではなく、異物として、異様な存在として感覚的に受けとめたことを、当時のままに感じながら語っているのである。

そして、このように自身の常軌を逸した嗜虐性と常ならぬいちの姿を恐怖感をもつて見出した「私」は、つづく父の病床の記憶でも、再び同じ形相のものを捉えていく。

「この窓の外の、あの松の木が重なり合つたうしろは崖がございますのよ。もう一つ山になつて、その上に榛の木が繁つて、木のまはりを大きな白い蝶蝶が」

それは違ふ。手の平ぐらいもあつて。

「白い蝶蝶じゃない、黒いのだ。真黒な」

「まあ」と云つて人の顔を見据えた。「そんな気がすると仰しやるのでせう」

さうかもしれない。自分で見たわけではない。見える筈がない。さう云はれて、そつちを見たけれど、蝶蝶なんぞは飛んでゐなかつた。父がさう思つてさう云つただけだ。

からだが硬くなつた。

「お苦しかつたのでせう。本当に残念な事をいたしました」

幾晩が続いたから、傍にゐて呼吸が出来ない様であつた。だから、からだが硬くなつて、どうしていいか解らない。

女が今現在の景色について話すのに対して、「私」は記憶の中の光景について、それも父の視線と言葉に寄り添つ

て、瞬発的に「それは違ふ」と反応している。このように過去の、しかも他者の思いに突如移入していくところには、先ほどのいちいじめよりも、記憶の中に没入する度合いが強まっていることが見て取れる。この没入により、「私」は出来事に対する解釈的説明をせず、ただ蘇ってくる当時の感触だけを語っていくのである。「からだが硬くなつた」と二度繰り返すのも、記憶の中の父の言葉や思いに寄り添ったために、病床の傍らでの反応が今に呼び起こされたものであろう。打つ手のない父の病状に接した際の息苦しさ、痛切さを、「私」はいま生々しく感じているのである。そしてそこに、いちが現れる。

その上に犬が跳び上がつて来て、病床の傍に四つ脚で起つた。自分の坐つてゐる同じ高さに、犬があるのを見た事がない。黒い犢の様に思はれて、ぞつとして追つた。家の犬である。「こらつ、いち」と云はうと思つたら、声が詰まつた。犬は高い縁鼻から、ひらひらと飛んだ。

ここには、父にとつては飼ひ犬が傍に寄つてきただけのことであらう出来事が、「私」にとつては全く違う光景で捉えられたことが窺える。「黒い犢」とも見えた「ぞつと」するような異様な姿、そして「ひらひらと飛」ぶ姿は、いちが土壇場において見せた反撃の姿と同じであり、明らかにいちいじめの記憶との連続性の中でこの場面が思い描かれていることがわかる。つまり、前段階で犬に向けた自身の常軌を逸した暴力性を意識し、いま父の今際の苦しみに接して緊張と不安に身を堅くする感覚を再現する「私」にとつて、ここでのいちには、機をとらえて「私」に反撃すべく無言で圧倒してくるようなイメージで捉えられているということなのである。

すなわち、記憶の中で「私」が「黒い犢」を見出すところには、「私」の動物的な興奮と嗜虐に駆られる異様な暗いあり方と、「えたいの知れない憂悶」の源たる父の病状と死に直面して無力であつたあり方が、「私」の実感において再現されているのであり、言い換えるならば、自身の存在としての幼さに対する負の感触が集約されてあぶり出されていると読むことができるのである。

(二)

・「わたくしは、いちの家内で御座います」

「何だと」

「まあ、あんな顔をなすつて。犬の家内では御座いません事よ。ほほほ」

・「いえ居りました。旦那様を存じ上げて居ります」

「さうか知ら。君の様なボーイはゐなかつたと思つたが」

「あの時分はボーイではありませんでした」

これらの箇所では、犬のいちが中年の男の姿で現れたのに加えて、女とボーイもまた、以前とは姿を変えた存在であることが示されている。「何だつたのだ」と確認しようとする「私」に、ボーイは、「それが旦那様の癖でせう」と言い、由比駅のホームで通過する列車を「気抜けがした様になつて見て」いたことを取り上げて、次のように指摘する。

「助役さんが云つてゐましたけれど、僕だつてさう思ひます。そんな事をしたら、それは列車だつてあの勢ひで動いてゐるのですから、ぼんやりした旦那様のなんかを持つて行つて、擦れ違ふ時に今度の上りに渡したのが返つて来るまでは丸でお留守です。いろんな事が起こりまさあね、僕なんか初めからさう思つてゐるから」

つまりボーイは、「私」がしばしば忘我の状態となつては様々な物事を見過ごしていること、そしてそれを後からしか認識しないことを言っているのだ。すなわちこれは、「私」の意識に穴があつて、自身では捉えきれていないものがあることの示唆である。いちと名乗る男、いちの家内だという女、ボーイにおける姿の変容というのは、そうした「私」の意識の不確かさ、「私」が認識しない世界の存在を象徴的に示すものだと解釈できよう。

ボーイの示唆は、さらに二つのトンネルの話として続く。既に述べてきたように、「私」の記憶には、自分自身で意

識しきれていない深層の部分があるわけだが、二つのトンネルは、まさにその記憶と明白にならない核心部分の存在を暗示するものとして語られていると思われる。

「そのトンネルとトンネルとの間で、大きな獣が轢かれました」

「犬だらう」

（略）

「馬鹿ぢやありませんか。いい加減にしたらどうです」

「怪しからん事を云ふ。それぢや何が轢かれたのだ」

「何だか知らないけれど、列車が第一洞を出て見たら、第二洞のこつちの入り口の所を、黒い獣が出たり這入ったり」

「大きな獣」「黒い獣」とは、「私」を記憶の再現へと誘い、未だ見据えられていない負なる核心部分をあぶり出そうとする存在に等しく、一つの記憶のトンネルを抜けて、さらにもう一つ、直視し難い記憶のトンネルの「入り口」を案内していることが見て取れる。その「大きな獣」が列車に轢かれたとは、記憶を通してその先を直視しようとする「私」のあり方を否定的に言うものである。

「もいい」

「よくはないです。」

網ノ濱の

茗荷の子

出たり

這入つたり

すつ込んだ

さうでせう。さうなんでせう。あははは」

手を離して人の顔をのぞき込んだ。耳許ががんとして、耳鳴りがする。松も鳴つてゐる。ボーイの白い顔と白い上衣が、境目がなくなつた。

「もういい」と言つて核心部分を見まいとする「私」に対して、ボーイは、物忘れの謂れがある「茗荷の子」や、「出たり／這入つたり／すつ込んだ」という「黒い獣」の動きに重なる詞を唄い、核心を捉えそうで捉えない「私」の意識状況や葛藤を指摘し、囁し立てる。「綱ノ濱の」と、岡山の地名を持ち出すのは、葛藤の原因である深層の内実が、郷里にまつわるものであることを示しているよう。

(二)で指摘したように、「私」は郷里での若い日のあり方を、異様さと不甲斐なさにおいて見出さんとしていると見られる。周囲の催促に対する反応も考え合わせれば、郷里にまつわる何らかの負の思い、過誤の意識が「私」の根底にあることが明らかである。しかしその実質は結局言語化されることがなく、明確に捉えることへの葛藤と惑乱に陥るところで終わるのである。それほどに認め難いのは、それが現在の自己に結びつく存在の負の原点だからであり、作品は、記憶によつてはじめて照らし出される負なる自己存在を、抵抗感と不思議さにおいて捉える感覚を結末に定位しているのである。記憶の再現というモチーフは、自己存在の相対化におけるリアリティを、意識と無意識の重層の中で表現することにつながつたと言えるだろう。

#### 四

作中で「私」が呼びかけられる「栄さん」という名は百閒の本名と同じであり、描かれるエピソードも、多くは百

聞自身の思ひ出を用いたものである<sup>(7)</sup>。例えばいちに關して言えば、百閒が實際に幼少期に飼っていた一という犬の思ひ出がそのまま使われている。

私が少年から青年に移る頃の心はとげとげしくて暗くて何とも云はれない変な調子を帯びてゐた。もう人のゐなくなつた広い家の中を、三間もある長い竹竿を持つてその一をなんの意味もなく無暗に、血眼になつて追ひ廻した。一は逃げられる丈逃げ廻つて、しまひに追ひつめられると、いきなり後を向いて白い齒を剥いて恐ろしい声を出して私に向ひさうな氣合を見せた。さうすると私は急に恐ろしくなつて竿を投げ出したまま座敷に逃げ上がつた。一を虐待して追ひ廻して、その恐ろしい顔を見る瞬間に、私の心のどこかに或る、何とも云へない、恐怖を裏打ちにした満足が浮かんたのである<sup>(8)</sup>。(大正七年八月十二日)

この日記の記述から、百閒が、飼犬をいじめた自身の暴力性、嗜虐性を、「春機発動期」の「にがにがしい記憶<sup>(9)</sup>」の一つとして振り返っていることが窺える。「何とも云はれない変な調子を帯びてゐた」「何とも云へない、恐怖を裏打ちにした満足が浮かんた」というところには、当時の心のありようには理屈で説明できないような異様な逸脱、制御できない本能的な鬱屈があり、自分が一種グロテスクな存在と化していたことを感じている様子が読み取れる。

また、複数の随筆にも飼犬一については記されており、それらはいずれも病床の父に焦点を置くものとなつてゐる。一例を挙げると次のごとくである。

いよいよ容態が悪くなつて、私共の目にも、何だか父はもうなほらないのではないかと思はれる様になつた或る日、何年も家に飼つてゐた一と云ふ大きな犬が、いきなり父の病床の近くの縁側に上がつて来て、父の方を見た。畳に坐つてゐる私の目に、その犬が牛の様に大きく思はれた<sup>(10)</sup>。(「たちちをの記」)

さらに「由比駅」より後に書かれた随筆「夜の杉<sup>(11)</sup>」には、一いじめについて「由比駅」と重複する描写が多く含

まれている。この随筆で興味深いのは、一をいじめた直後のこととして、近い将来に家業を閉め、家も人手に渡ることになると母から告げられたことを書いている点である。

一を追つ掛け廻した後、母から聞かされた話は私には何の影響もなかった。将来を悲観するなど云ふ気持は全然起こらなかった。ただ毎日毎日、何となくいらいらして、じれつたくて、何かをぎゅつといちめてやりたくてむずむずした。「夜の杉」

このように中学生の自分が現実を受けとめられず、ただ闇雲に暴力的な衝動を抱えていただけであつたことを捉えた上で百閒は、続く箇所で廢業と父の病死を語っていく。つまり作品外にある百閒自身のこととしては、家や父の置かれた状況を受けとめられず、衝動のままに行動していた自己の幼さが、明確に認識されているのだ。

以上のような日記や随筆の記述に整理されていること、さらに作品中の「網ノ濱」が百閒の父親に所縁のある地であることも考え合わせるならば、「由比駅」を描く百閒が、作中の「私」が感じる自己の異様さと不甲斐なさの前提に、苦しんで死んだ父に対する現在の自身の思いを置いていたことは間違いないだろう。そこには、六十八歳にしてなお、自分というものを故郷や父の思い出に照らして見る意識を持ち続ける百閒の姿が鮮明である。百閒文芸の出発点に位置づけられる作品「冥途<sup>(2)</sup>」で、百閒は思慕の対象として亡き父を登場させている。そして、「あんなになるのも、こちらの所為だ」と語る亡父の視線において、自身の未熟を捉える意識を表した。つまり、十六歳で直面した父の死以来、「冥途」から「由比駅」に至るまで、百閒は亡き父への思慕の半面で、常に父の跡を継ぐ自分自身の不甲斐なさを痛切に感じ続けていたことが窺えるのだ。

しかしあらためて述べるならば、「由比駅」という作品の眼目は、非現実的状況に誘われた「私」が、思いがけず過去の記憶を再現し、自己存在の原点にある異様さ不甲斐なさというものを、意味づけを排した実感として、直視し難さとともに感じていくところにある。「春機発動期」とひとまず名付けたものの実体とは、その実、言葉では明確

に示すことの難しい心のありようであろう。すなわち、「由比駅」とは、現在の自己を形作っている根源を、遙かな故郷、父の死に遡って確認せんとする百間の止まない志向性に基づき、自己の負なる原点に触れていく生々しい存在感覚を描き出した作品であり、またそうした捉え難い負の部分を抱える人間存在のあり方そのものを、記憶の再現を通して形象化した作品であると述べることができるのである。

# 註

- (1) 「文芸春秋」(一九五二〔昭和二七〕年八月)に発表。『無伴奏』(三笠書房、一九五三〔昭和二八〕年五月)に収録。
- (2) 「新小説」(一九二一〔大正一〇〕年一月)に発表。『冥途』(稲門堂書店、一九二二〔大正一一〕年二月)に収録。
- (3) 「小説新潮」(一九五一〔昭和二六〕年六月)に発表。『阿房列車』(三笠書房、一九五二〔昭和二七〕年六月)に収録。
- (4) 一九五一〔昭和二六〕年三月。行程は「区間阿房列車」の記述と同一。
- (5) 「区間阿房列車」は、東京―静岡間の旅で、由比・興津に遊ぶ。御殿場線經由東海道線を利用。「由比駅」は、東京―由比で、東海道線のみを利用。
- (6) 野口武彦「夢」と「笑い」のディアレクティク―内田百間の幻想言語空間をめぐって」(『ユリイカ』青土社、一九八四〔昭和五九〕年二月、五五頁)。
- (7) 作中に用いられた主なエピソードが記された随筆作品は以下のとおり。
  - ・ 岡友のおばさんの棺桶が飛び出した話
  - ・ 「夜の杉」(『小説新潮』一九六〇〔昭和三五〕年一月)、「見ゆる限りは」(『小説新潮』一九六八〔昭和四三〕年六月)。
  - ・ 父親の闘病と飼い犬一の話
  - ・ 「たちちをの記」(『中央公論』一九三七〔昭和一二〕年六月)、「夜の杉」(『小説新潮』一九六〇〔昭和三五〕年十一月)、「葉が落ちる」(『小説新潮』一九六九〔昭和四四〕年九月)。
  - ・ 列車の通過を眺めた話
  - ・ 「通過列車」(『大和』一九三二〔昭和二七〕年十一月)。
  - ・ 「残夢三味残録」(『小説新潮』一九六八〔昭和四三〕年五月)。



(10) 「たちちをの記」(前掲)。

(11) 「夜の杉」(前掲)。

(12) 「東亜之光」(一九一七〔大正六〕年一月)に筆名内田曳象で発表。「新小説」(一九二二〔大正一〇〕年一月)に掲載、『冥途』(稲門堂書店、一九三二〔大正二二〕年二月)に収録。